

知多地域における牛ウイルス性下痢ウイルス対策の課題

西部家畜保健衛生所 おおつぼゆみ 大坪祐未

○はじめに

牛ウイルス性下痢ウイルス（BVDV）は、牛ウイルス性下痢・粘膜病の原因ウイルスであり、下痢や肺炎、異常産など様々な症状を引き起こす。また胎仔の感染時期によっては、持続感染牛（PI牛）となり、生涯にわたり多量のウイルスを排出し、主要な感染源となる。今回、PI牛摘発農場において対策を実施するとともに、知多地域における課題も明らかとなったので報告する。

○発生状況

平成29年8月から平成30年8月に3農場（酪農2、乳肉複合1）5頭のPI牛を摘発し、2農場（酪農）では各2頭を摘発した。乳肉複合では、過去にBVDVへの急性感染牛が確認されており、PI牛の存在が危惧されていた。また、5頭の母牛はいずれも妊娠期の移動歴が無いことから、自農場における感染であったと推察された。

○対策

本県では、北海道に預託する牛のBVDV遺伝子検査を行っているが、PI牛が摘発された3農場については、同居牛検査及びPI牛摘発後の産子検査を推奨し、各農場の実情に合わせて実施した。

○課題

知多地域では、酪農家の約4割（33戸／77戸）が乳肉複合経営を行っており、ホルスタインの初妊牛を導入してF1子牛を産出し、自農場で肥育・出荷している。また、乳肉複合以外においても初妊牛の導入を中心とする農家が、15戸／44戸あり、ウイルスを農場に持ち込む危険性がある。更に、ホルスタイン雌牛の自家育成を行っている農家についても、預託をしていなければ検査を行っていないため、PI牛が農場内にいる可能性も否定できない。

BVDV対策はPI牛の摘発・とう汰が重要であるが、PI牛は外見上健康なまま発育することも多く、検査を実施しなければ摘発することが出来ない。知多地域ではBVDV検査を実施している農家が少なく、農場にPI牛が存在する可能性があることから、今後検査を行っていない農家に対し、疾病の概要及び対策についてパンフレット配布や勉強会を開催し、BVDV対策を強化していきたい。